博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏　　名	黄　朝煌
学　　位	博　士（文学）
学位記番号	新大博（文）第 14 号
学位授与の日付	令和 3 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 4 項該当
博士論文名	大谷光瑞と台湾高雄熱帯農荘「逍遙園」の研究
論文審査委員	主　査　准教授　柴田　幹夫
	副　査　准教授　角谷　聰
	副　査　准教授　池田　英喜
	副　査　工学院大学客員研究員　菅澤　茂

博士論文の要旨

本論文は、本願寺（ここでは西本願寺を指す）第 22 世法主である大谷光瑞（1876～1948）が 1940 年に台湾高雄に建設した「逍遙園」について歴史的、建築的観点から分析し、建築に至る過程や建築方法そして「逍遙園」と台湾の時局に関わる大谷光瑞の言説などを資料に基づいて検証することを目的とする。本論文の構成は以下の通りである。

序章は、主として「逍遙園」に関する先行文献の紹介と、筆者の「逍遙園」に対する問題の設定を行ったものである。

第一章「大谷光瑞と高雄について」では、大谷光瑞の生涯を概略し、とくに台湾とりわけ高雄との関係を中心に記している。光瑞は「台湾総督府」から「熱帯産業委員会」委員に委嘱され、台湾における産業の振興を提言するなど台湾に多大な関心を寄せていた。その終結点は『台湾島之現在』（大乗社発行、1935 年）の執筆であった。台湾の現状を総合的に考察し、時の拓務大臣児玉秀雄に提出した報告書が元になっている。さらに光瑞は、「熱帯産業委員会」委員として台湾の主要産業である茶、砂糖、果実などの生産から販売ルートの確立や社会資本の整備などを訴えていた。

第二章「熱帯農業試験地時代の大谷光瑞」では、台湾の熱帯農業について「逍遙園」との関係をまとめたものである。「逍遙園」は熱帯農業を発展するために作られた農場であった。それは大谷光瑞の台湾での投資であり、実験的な試みでもあった。彼は秘書の広瀬了乗（蘭領

東インド農林工業株式会社取締役）に土地の買収を指示し、果樹園や茶園そしてパイナップル工場などを創設した。そのために高雄に「逍遙園」を建てたのである。高雄に「逍遙園」を建設するに当たって、その用地の選定などについて近年発見された「大谷光瑞所有地」と標した地界標により考察を加え、また当地の当時の電話帳などから光瑞の高雄での住所を明らかにしている。

第三章「「逍遙園」別荘の創建時期について」では、「逍遙園」の建設資金の問題や設計と施工、そして工事期間などについて資料に基づいて明らかにしている。建築施工に関しては、大谷光瑞自ら「逍遙園」を計画し、森田隆之及び二角幸治郎に任せた。森田隆之は「逍遥園」の建設を請け負った。また二角幸治郎は日本伝統的な大工であり、木材建築と装飾を担当した。近年二角幸治郎氏のご子息二角龍蔵氏にインタビューを試み貴重な写真などを拝借して史料的裏付けを行った。さらに「逍遙園」開園式の様子を当地の新聞である『高雄新報』や『台南日報』などを使用して、高雄における「逍遙園」の位置づけを明らかにした。また開園式の際に配布された台湾島をデザインしたお皿について若干の考察を試みている。

第四章「「逍遙園」の生活について」では、大谷光瑞自身が詠んだ『逍遙園雑詠』五言律詩に題材を取り、「逍遙園」内での生活や時局との関係の中での光瑞の不安や焦燥感を詩に託し、光瑞の気持ちを分析したものである。また併せて「逍遙園」内の風景や動物、植物の分析も行った。そしてそこで暮らす大谷光瑞とともにした「大谷学生」の行動や隣接している農場での働きぶりなどを明らかにしている。

第五章「近代文化住宅としての「逍遙園」について」では、「逍遙園」を「近代文化住宅」として位置づけた。大正から昭和前期にかけて、「近代文化住宅」といわれる建築様式が流行した。「逍遙園」は当時としては珍しい鉄鋼と木材を組み合わせた非常にモダンな建物であった。また時局に即応するために「防空壕」なども備えていた。

「逍遙園」の建築について簡単な分析から始め、「逍遙園」は、非常に希有な建築様式を採用していると結論づけた。レンガ作りと鉄骨そして木材を組み合わせて作られた建物であり、主として木材は、京都伏見の本願寺別荘である「三夜荘」からの移築であり、また鉄骨は八幡製鉄所で作られたものを使用している。そして外壁などは当時の流行であるサンゴの遺骸を細かく砕き、壁土に混ぜた物であり、高雄駅や当時の高雄市役所などでも採用されているものであった。また「逍遙園」内には大小二つの防空壕が用意されていた。アメリカとの本格的な開戦を控え、またアメリカの対日政策の転換、つまり石油や鉄鋼の禁輸などが実施され、日本経済にも大きな打撃を与え始めていた。高雄港は南洋からの中継地として大きな役割を果たすとともに、アメリカ軍の攻撃対象の地となった。防空壕は高雄市民に対しての安全啓発でもあった。

終章では、本論文について、とくに「逍遙園」に対する大谷光瑞の考え方を『逍遙園詠歌』

から再度分析を加えている。また光瑞の政治的立場および西洋列強に対する批判などが読み取れる。「逍遙園」の命名について荘子の「逍遙遊」から取り出して、光瑞の精神的な居場所の確保、修行の場であると考えられる。さらに「南進論」の立場から台湾高雄の地政的な有利さを考え、台湾の発展は、台湾のみならず、日本の発展にもつながるということを明らかにした。

以上が博士論文の要旨である。

審査結果の要旨

本論文は、大谷光瑞の台湾高雄にある別荘「逍遙園」について、様々な角度から取り上げた論文として高く評価することができる。本論文の評価できる点は以下の五点である。

第一点目は、1940（昭和 15）年に台湾高雄に造られた大谷光瑞の別荘「逍遙園」は、日本の敗戦により、大谷光瑞や「大谷学生」の台湾からの引き揚げに伴い、主なき「逍遙園」は、大陸から台湾にやって来た外省人たちの眷村となった。高雄の都市化により、眷村から退出して行く人が多くなるに連れて「逍遙園」は廃墟同様の建物となった。本論文筆者の黄朝煌氏などが中心となり、「逍遙園」の保存運動が開始された。その結果 2010 年に文化財に指定され、「逍遙園」は保存されることになった。2017 年から修復工事が始まり、昨年 2020 年の 11 月には修復なった新生「逍遙園」の開園式が行われた。従来ほとんどの人が見向きもしなかった「逍遙園」に光を当てた功績は評価される。

第二点目は、大谷光瑞の台湾における足跡を台湾側に残された資料などにより克明に調査したことである。大谷光瑞は本願寺の法主として、また中央アジアへの探検隊の派遣者として知られているが、台湾との関係については余り知られていなかった。台湾と大谷光瑞の関係を光瑞の著作『台湾島之現在』や「熱帯産業調査会」委員就任そして「逍遙園」開園式に記念品として配布された台湾島を描いた清水焼の皿などの経緯を詳しく調べたことは評価できよう。

第三点目は、「逍遙園」の設計、施工者について、また建築にかかる費用やその工面方法、そして建築構造について詳しく調べていることは評価できる。とくに建築に関わった京都出身の二角幸治郎氏のご子息二角龍蔵氏に対して聞き取りをしている。口述歴史の方法をとり、文献だけに頼らない方法は評価できる。また「逍遙園」の建築構造においては、鉄骨と木材そしてレンガを組み合わせて造った珍しい工法で造られたものだと評価している。とくに台湾高雄の気候風土を十分に考慮したものであるとしている。

第四点目として、従来研究者が用いなかった資料『逍遙園雑詠』を用い、大谷光瑞の心情を吐露した多くの詩（漢詩）から、当時の光瑞の置かれた状況を明らかにしている点は大い

に評価できる。その中には時局に対するものが多く含まれており、光瑞の焦躁感を窺い知ることができる。

最後に五点目として、「逍遙園」は当時流行した近代文化住宅であると位置づけている点である。大正時代後半から昭和初期にかけて流行した近代文化住宅として「逍遙園」を位置づけている。鉄骨と木材を組み合わせて造られた建物であり、洋間の応接室を備え、また時局に合わせて防空壕を設置するなどモダンな建築物であったということを実証している。

以上のように、「逍遙園」という建築物をテーマとした論文であるが、多くの歴史的資料を探し求め、また『逍遙園雑詠』という漢詩集を題材にして分析したことは評価に値することができよう。しかし、本論文における一部解釈の誤りなどが散見し、また本人の主張が不明確な部分もある。さらに台湾にも浄土真宗本願寺派は深く広く浸透していたのであり、宗教者としての大谷光瑞に関する記述があれば、本論文の価値をさらに高めるものとなったであろう。以上のような改善すべき点もあったが、それらは本論文の学術的価値を損なうものではない。

なお、この論文は建築を中心にしながらも、大谷光瑞の台湾との関係を歴史的に検証し、また『逍遙園雑詠』という漢詩を十二分に資料として扱っているので、博士（文学）の学位を授与することが適当だと判断した。

巻末に「大谷光瑞と台湾、南洋の足跡」と題する年表が附されているが、大谷光瑞と台湾の関係を理解するのに有益である。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。